南極寿星（カノープス）

中島　孝*
南　政次**

りゅうこつ座の一等星カノープスは我が国の天文ファンの憧れの的である。一つにはカノープスがシリウスに次ぐ明るい一等星でありながら，その位置が赤緯マイナス53度あたりで地理的には東北地方以北では決して見られないこと，東京あたりでも僅かに高度は2度ぐらいにしか昇らないことによる。だから故山本一清博士が京の五条大橋の上からこの星をご覧になったというような伝説が夢物語のように伝わるのである。福井地方では約1度ぐらいの高度であろう。しかももう一つ困難な条件が加わる。それは，この星が冬の星座に位置しているので，荒天続きの中ではなかなか捉えがたい点である。

その上カノープスに憧れるのは，目出度い星と考えられていることにもよる。これは中国からの伝来である。中国大陸でも，たとえば，古都長安で3度19分，洛陽では2度51分の高さということだから，この特殊な事情は似ている。そして南の地平に年頭しばらく顔を見せるのを天下泰平の吉瑞とした。「老人星」は彼の地の呼び名であるが，詳しくは「南極老人星」，もしくは「南極寿星」である。我が国には平安時代に既にこの信仰が入っているらしく『類聚国史』（894年）の延暦22年（803年）の項に「老人星は瑞星なり，現るれば即ち治平にして寿を主る」とあるというのはそっくりそのまま翻案であろう。この伝承は鎌倉・室町・江戸時代と受け継がれた。たとえば元禄2年（1689年）1月16日に「老人星現わる。瑞星なり」（『武江年表』）。これは一種の観測記録である。またこの星の精はいわゆる七福神の寿老人となる。

ところで，外来文化と無縁に近い我が国土着の伝承としてはカノープスはどうだっただろうか。故野尻抱影氏の研究によれば，この星のローカルな別名はかなりの数にのぼり，特に太平洋岸に分布するという。もっとも有名なのは「めらぼし（布良星）」で，これは千葉・房総突端の布良に由来する。太平洋岸においてはカノープスは海の彼方にわずかに現われる。とくに冬の海であってみれば，海の男達にとってはむしろ凶に通ずる。ほかのメラボシのヴァリエーションも大体において不吉なものであるようである。船底一枚下は地獄という生活をもった人達と殿上人の違いがあるともいえるし，島国と大陸国との違いともいえよう。少なくとも我が国に多くみられるいわゆる役星としてカノープスも例外ではなく，星空のロマンはすべて外来であるという我が国の特徴がはしなくもカノープスにあらわれている。

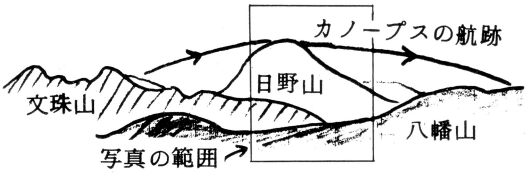
福井地方においてどのように人々に伝えられてきたのであろうか。とくに福井平野に立つと文珠山からたちのぼり日野山に一旦かくれまた現われまっすぐ地平に没する。このめずらしい明る

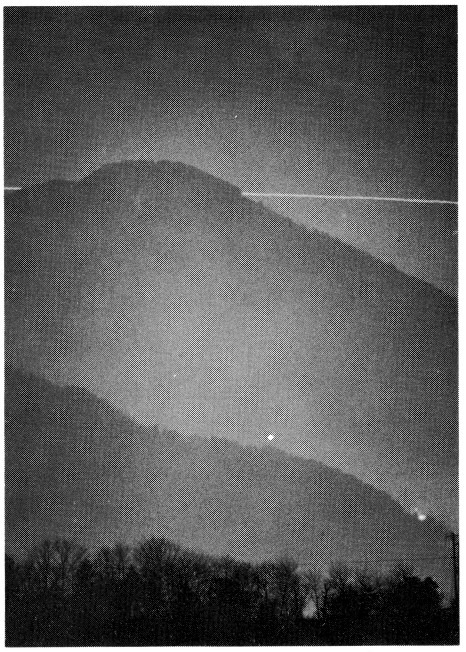
---

*　福井県立丹生高等学校
**　京都大学数理解析研究所

い星について何もなかろうはずはない。古老の話でも聞けるならというのは我々のもう一つの憧れである。

日野山を横切るカノープス





カノープスは，りゅうこつ座の一等星で赤緯−53°附近にあって，我が国では東北地方以北では見ることが出来ない。博物館屋上からは冬の晴れた日にわずかに見えることがある。右の写真は1980年1月5日22時21分から22時39分迄500ミリ望遠（絞りｆ８，フィルムはASA100）で博物館屋上から露出して，日野山を過るカノープスをとらえたものである。（撮影：中島孝・南政次）

〔この項をまとめるにあたり，野尻抱影著『星の方言集・日本の星』（中央公論社1973年）と『日本星名辞典』（東京堂　1973年）を参考にしたことを附記する。〕